

先週の礼拝メッセージ(2023年7月16日) ベン牧師

「依りすぎる信仰」 マタイによる福音書 15:21-28

ティルスとシドン地方に行かれたイエス様のもとに、この地方に生まれたカナンの女がやってきました。彼女はこの地方の土着の宗教の中で育った異邦人です。そんな彼女には、悪霊につかれた娘がいて、母子共に苦しんでいたのです。

「主よ、ダビデの子よ、私を憐れんでください。」と彼女は叫びました。しかしイエス様は、何もお答えにならなかったのです。いくら制しても叫び続ける女に、弟子たちはイエス様に「この女を追い払ってください」と願います。なぜ弟子たちは、女の娘を癒してあげてくださいと言わずに、この女を追い払うように願ったのでしょうか。答えは簡単です。弟子たちはユダヤ人で女は異邦人だったからです。当時ユダヤ人は異邦人を見下し嫌っていたのです。弟子たちもユダヤ人で、ユダヤ文化の中で育っていましたから、異邦人の願いなど聞く必要がないと思っていたのです。それを悪いことだとも思っていなかったのです。

注目するのは、女が「ダビデの子よ」とイエス様を呼んだことです。非常にユダヤ的表現であり、イエス様をメシアとして認めているということです。この地方にもユダヤ人は住んでいましたから、なんらかの形でイエス様のことを聞き、彼女なりにイエス様をメシアとして信じていたことがわかります。そして、メシアなら娘の悪霊を追い出して癒していただけると信じて出てきたのです。

「私はイスラエルの家の失われた羊のところにはしか遣わされていない」と、イエス様は女を突き放します。なんだか冷たいようにも感じますが、イエス様がこのようにされるときには必ずそこに意図があります。一つはこの場にいる弟子たちへの教育のためであったでしょう。彼らの中に根深くある異邦人への嫌悪を、弟子たちがカナンの女の信仰に接することで、彼らが自覚し直すためです。イエス様は自らイスラエル以外には遣わされていないとおっしゃいますが、聖書には何箇所も異邦人への癒しや四千人の異邦人への給食などの記事が記されています。復活後には弟子たちに全世界に出ていき福音を伝えよともおっしゃっています。異邦人をどうでも良いと思っておられたわけではありませんが、イエス様が宣教されたのは

3年余りと限られた期間でしたから、当然ユダヤが中心でした。そしてイエス様は常に、ご自分が去った後の弟子たちのために、彼らを教育し整えていくことに重きを置かれていたことは事実です。イエス様はあえて突き放した言い方をして、それでもすがりついて願うことをやめない女の信仰を見せて、彼らの偏見を正そうとされたのです。この女はイエス様の前に平伏して願ったとあります。これはイエス様を礼拝したということです。それでもイエス様は「子どもたちのパンを取って、小犬たちに投げてやるのは良くない」とおっしゃいます。女は「小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます」とすがり続けるのです。

「女よ、あなたの信仰は立派だ。」イエス様はついに彼女の願いを聞かれるのです。弟子たちにとってこのイエス様の言葉は少なからず衝撃だったことでしょう。イエス様は弟子たちを、信仰の小さい者とか信仰の薄い者とかと言って嘆かれることがあるからです。そして目の前で、イエス様は異邦人の信仰を立派だと誉められたのです。この出来事は彼らの記憶に残り、十字架後の宣教に大きく影響したことでしょう。

いっぽう女は、犬でさえテーブルから落ちるパン屑はいただきますと、諦めずにイエス様に願い続けます。これは、パン屑ほどの少しの恵みであっても、イエス様が働いてくださるなら娘はきっと癒されるという、彼女の信仰の告白だったのです。

ここでのイエス様の言葉、態度は、弟子たちを教えるため、そして、この記事を読む私たちが、人種性別年齢などの区別なく、信仰をもって諦めないで主の前に出ていくなら、主は応えてくださるということを教えています。そしてこの女の娘は癒されました。

私たちの抱えている問題は、一人一人違うでしょう。しかし、全員に共通している助けは、永遠の滅びからの救いです。これ以上の祝福はありません。イエス様は私たちを救うためにこの世に来てくださいました。カナンの女のしたことはただ一つ、イエス様をメシアとして信じ、諦めず願い続けました。私たちに必要なこともただ一つだけです。イエス様をメシアとして信じ仰ぎ続けることです。そうすれば必ず、主の時に主の方法で主の栄光を現してくださいませ。

